

【平成 26 年度基盤教育ベストティーチャー賞】受賞者 受賞理由

○人文学部 中島 宏氏のベストティーチャー賞受賞理由

中島宏氏が平成 20 年の赴任以来担当している「日本国憲法」は、学生の関心も高く、履修者は毎年 200 名を超えている。大教室の授業に際し、氏は、新聞記事、ネット上のニュースサイト、漫画等の豊富な資料を基に周到に準備し、実際の講義では「学生自身が考えたいくなる」ように質問と解説を繰り返しており、徹底した双方向のやりとりを実現している。軽妙な語り口でありながらポイントを押さえた適確な説明に対する学生の評価は、授業改善アンケートの総合評価、過去 5 年間の数値 4.42、4.50、4.47、4.83、4.65 に如実に表われている。また、平成 20 年の FD 合宿に参加したほか、平成 20 年度、21 年度のベストティーチャー賞公開授業を見学するなど、授業改善にも積極的に取り組んでいる。

○理学部 栗山恭直氏のベストティーチャー賞受賞理由

栗山恭直氏は、これまで基盤教育の前後期の授業『サイエンスコミュニケーション I、II』において、ICT とグループワークを取り入れた質の高い学生主体型授業に取り組んでこられた。この授業は、人間力（課題発見・探求能力、問題解決能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、応用力）を育成する内容が適切に配置されると同時に、学生が時間外学習に積極的に取り組んでいくような高度な授業デザインとなっている。氏は、学内外の様々な先進的授業を見学するとともに、自身の授業も一般に公開し、ピアレビューを行うことによって授業の質的向上に努められてこられた。こうした氏の取組みは学生から高い支持を受け、授業改善アンケートにおいては、過去平均 4.6 以上の高評価を得ている。本授業の内容は 2014 (平成 26) 年に出版された「“つばさ”プロジェクト」の授業改善冊子に詳しく紹介され、他の教員の参考となっている。一方、氏は山形大学の FD 活動の推進にも力を入れ、平成 18 年度から FD ワークショップのコーディネーターやパネリストを務め、基盤教育の教育改善に尽力されている。更には、文部科学省の平成 20～22 年度の教育 GP や平成 24～28 年度の大学間連携共同教育推進事業の担当スタッフに従事され、山形大学のみならず全国の大学の教育改革に多大な貢献をしている。

○基盤教育院 渡辺絵理子氏のベストティーチャー賞受賞理由

平成 25 年度において、氏は生物科学に関連した授業を 8 コマ開講し、のべ 778 名の学生に対して、アカデミックな生物学へ誘う高度な内容、生物リテラシーとしての側面を持つ入門的内容等を教授している。大学では複雑な生命現象を立体的に理解することが求められるが、氏の担当授業では、専門的知識に裏付けられた豊富な例示や実証を元に「生物は暗記科目である」という先入観を外し、学生が主体的な学びへと向かうよう配慮されている。たとえば、豊富な画像資料を配布し、適宜動画を使用することにより、ダイナミックな生命現象についての理解を助けている。また、授業の内容と関連したニュース記事等を紹介するなど、知識を自分たちの人生と密接に関連したものとして理解できるよう工夫している。氏の実践が優れていることは、「学生による授業改善アンケート」の総合評価が 4.50、4.45、4.26、4.95、4.53、4.60、4.46、4.92 と安定して非常に高い評価を得ていることから明らかである。

○基盤教育院 千代勝実氏のベストティーチャー賞（学生推薦）受賞理由

平成 25 年度末の学生投票の結果、千代勝実氏が最多得票を得て、学生推薦のベストティーチャーになった。投票用紙には「力学の授業がとてもわかりやすく、ちゃんと学生の事を理解してくれるため」「優しく丁寧に物理を教えてくれて、めちゃ分かりやすいから」「他の先生が教えないことまでやっている」「学生に対して非常に温厚である」「人を覚えてくれている」「大学生の立場を一番理解していると思う」「何が正しくて何が間違っているかを教えていただけるから」の理由が書かれてあった。千代氏は、後期に開講されている再履修者用の「スタートアップセミナー」を担当し、この非常に困難な授業を成立させ、多くの学生たちを立ち直らせていることは、特筆に値することである。これからも再履修者用の「スタートアップセミナー」を担当し続け、山形大学の就学困難な学生の支援をしていただくことを望むものである。また、氏は基盤教育院の中心的な教員として、カリキュラム改革や授業改善について重要な役割を担っている。加えて、平成 24～28 年度の大学間連携共同教育推進事業の担当スタッフに従事され、山形大学のみならず全国の大学の教育改革に多大な貢献をしている。

【平成 26 年度基盤教育ベストティーチャー新人賞】受賞者 受賞理由

○人文学部 大久保清朗氏のベストティーチャー新人賞受賞理由

大久保清朗氏は、赴任以来、「フランス語 I」（前期）および「フランス語 II」（後期）を担当している。授業は解説が丁寧でわかりやすい。また全体の構成も小テスト、解説、ドリルとメリハリが利いるため学生はみな集中して授業を受けている。誤った点をひとつひとつ丁寧に解説している点は初習外国語では重要なことである。氏が丁寧な授業を通じて学生の信頼を得ていることは昨年度の授業改善アンケートの総合評価 4.38、4.48、4.43 でも明らかである。ちなみに同氏は平成 24 年度の本学 FD 合宿セミナーにも参加しており、基盤教育の授業改善に意欲的に取り組んでいる。

○理学部 深澤 知氏のベストティーチャー新人賞受賞理由

数学を専門としない学生への深澤氏の丁寧な講義には定評があり、親しみやすい語り口ときちんと準備した講義内容で、授業改善アンケートにおいても、100 人近い受講生に講義を行ないながら、常に 4.4 以上の高い評価を受け続けている。また、平成 22 年度の FD ワークショップにも参加し、講義内容の改善にも真摯に取り組んでいる。深澤氏が担当しているサイエンススキルの微分積分学は、講義内容が無味乾燥な数学であり、学生の勉学意欲を維持するのが非常に難しい科目である。深澤氏は、独特の語り口を駆使して、十分な準備の上で学生に飽きさせない講義を継続的に行っている。現状に満足せずに更なる研鑽を続ける深澤氏は、その技量において若手教員の中でも特筆すべきものであり、ベストティーチャー新人賞の受賞に値すると判断するものである。

以上